

# 大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34

京都橘女子大学図書館 小林倫道気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

## 大図研大学「情報管理論」 受講申込者57名の盛況



今期大図研大学は、「情報管理論」というテーマの「切実性」「タイムリー性」「悩ましさ」がウケて、申込者が予想をなんと3倍も上回る60人近くに達し、事務局は会場変更を余儀なくされる等、うれしい悲鳴を上げています。

既に第1回(10月・参加41名)、第2回(11月・参加31名)の講義が行われ、「大変良かった」との感想がアンケートに多数寄せられています。また、懇親会も開催され、大勢の参加で大いに盛り上がりました。第3回(12月12日)には44名の参加者が予定されています。

今月号ではこれまでの参加者によるレポートを特集します。一度は参加を迷っていたあなた、今からでも遅くはありません。飛び込み当日参加も歓迎しますので奮ってご参加下さい(第4回「データベースの利用」1月23日(日)/第5回「図書館システム論」2月20日(日)/第6回「ニューメディア論」3月13日(日)。連絡先; 京大教育学部図・竹村075-753-3014)。

### 目次

### 大図研大学参加レポート特集

|            |            |
|------------|------------|
| 富山 久代 (2頁) | 川北恵美子 (4頁) |
| 浅井 直子 (3頁) | 湖城 強 (5頁)  |

## 「情報管理概論」 (第2回柴田正美先生) を聞きながら

富山久代 (橿原市教育委員会)

本当に情報って何なのでしょうね。柴田先生のおっしゃるように、時代によって変わり分野・対象によって異なり、立場によって違う。

たとえば私が先史時代のクロマニヨン人であったとして、「マンモスがどこその草原にいる」という情報はどうでしょう。もし私が満腹していたら、その情報は緊急的有用性をもってないといえるでしょうし、反対に飢餓線上にあったら、すぐさま斧だか槍だかをひっさげて走り出すほどの、緊急かつ重大な有用性をもってるといえるでしょう。つまりは情報の「情報性」とは、受容する側にとっての有用性にあるのですね。それにしてもマンモスや果実の所在情報だけで足りている時代だったら、図書館員も情報管理もいらないわけだ。

とまあ、こんなことをとりとめもなく思いながら、講義をきいていたわけです。というのも、私が公共図書館畑の人間であるからでしょう。公共図書館という場では、情報も情報管理も、いわば第二義的な存在でしかありません。しかし、本当にそうなのかどうか、そのあたりのことをじっくり考えてみたいというのが、今回大図研大学に参加させていただいた理由なのです。

柴田先生の講義は、①揺れる情報の定義、から始まって、②情報の種類分け、③情報の特性、④情報と認知の問題、⑤情報管理の定義、⑥情報管理の範囲、⑦情報管理の原則、⑧情報管理の今後の課題、と続いたのですが、私にとって非常に興味深かったのは、④の〈情報と認知の問題〉でした。レジュメにはこうあります。

- (1) 小学生相手では情報の表現方法が変わらなければならない
- (2) 認知能力は、情報を求める人の全人格である
- (3) 情報を提供する組織・機関の責任
- (4) 情報の加工・変換・媒体の変換

さらに「情報として認知したか否かにかかわらず、情報を受取った時点で、認知能力そのものが変わる」ともおっしゃいました(正確な引用ではないかもしれませんが)。

これはどうやら、「ある対象を見る、という行為自体が、見ている対象そのものを变化させる」という量子力学のセオリーの正確なアナロジーではありませんか。

「情報」という光子が私たちに向かって飛んでくる。それが何を意味するのか、どれほどの価値があるのか、私たちは正確には知らない。しかしこの光子は、それを受取った私たちの認知のありようを、わずかではあるけれど、確実に変化させる・・・。

「情報化社会」とはどういうものなのか、何となく想像できるような気がしてきます。

画像情報と認知の問題、認知能力と情報格差の問題、認知に関して先生が提起された問題はまだまだあります。これらについて、さらに情報を得たい、というのが現在私の、情報欲求。

講義の後半強調された、情報管理における技術の重要性について、それこそが図書館員にとっては最も大事なことなのですが、これについて触れる余裕がなくなりました。先生の講義をダシにして、好き勝手なことを述べましたことを、おわびいたします。

## 大図研大学「情報管理論」への感想

浅井直子 (同志社高等学校)

私は高校図書館の司書として、図書館に関わる中で、学校図書館をとりまく状況が大きく変わってきていることを実感し、広く確かな手応えとして情報学を学びたいとの思いを以前から持っていました。たまたまこの研究会を紹介いただき、自分自身にも、また学校図書館としても得るところがあるのではないかと思い、大図研大学という名には恐れを感じつつ参加してみました。二回とも非常に有益なもので、指針となるものを得ることが出来ましたが、感想を一言で述べると、大学図書館と学校図書館との格差が余りに大きく、戸惑いを感じたというのが正直な気持ちです。以下具体的に身近な例をもとに、感じたことを書かせていただきます。

まず現代社会において、生涯学習が推進される中で、自ら学び成長する力を育てる場としての図書館の役割は非常に大きいと思われまます。とりわけ児童生徒が最初に出会う学校図書館はその後に続く大学図書館、生涯を通じて知的な場となる公共図書館の利用や、自主的に学習する姿勢に多大な影響を及ぼすものだと考えます。しかし学校図書館の実態は「教育課程の展開に寄与する」という目的も必ずしも達成されてはならず、さらに図書館の三要素である設備、資料、人(司書教諭、司書)の問題も十分に整備されていない現状にあります。一方情報化社会という面から考えてみると、大学図書館のシステム・情報量・情報源等、飛躍的に高度化した現状を知るにつけ、学校図書館とのギャップに愕然としてしまいます。勿論情報化社会に対応した学校図書館も徐々に出来てきています。

「情報管理概論」の情報の種類分けによる伝達媒体を例にとり、私の学校の状態を考えてみました。まずコンピュータ化はされておらず、情報が音声、文字、記号、映像の媒体を持つ中で、図書、雑誌、新聞、カセットテープという媒体しか提供出来ない現状にあり学校図書館が目指す学習情報センター(コンピュータの導入と活用、従来の図書資料、視聴覚資料に加えCD、FD、LD、ビデオ、電子出版物等の教材ソフトを収集し提供していくメディアセンター構想)どはほど遠い環境にあります。このような現状の中で、私はまず何よりも的確に情報提供していきたいということを、毎日の課題としていますので、レファレンスにかなりの時間を費しています。時間で解決出来ない問題、情報が得られないものは大学図書館(同志社情報センター)にFAXで検索を依頼し、教員、生徒の利用を大学図書館へ広げるネットワーク化の足掛かりとしています。より多く納得いく情報を得ることの出来る大学図書館で高校生の利用もサポートしていただけることを期待することになります。大学図書館の教育援助機能の中に、学校図書館へのサービスは含まれるのでしょうか。市民への開放を視野に入れつつある現状の中で当然とは思いますが、同志社という一貫した教育機関であることから何の抵抗も感じませんが、他の大学への依頼ということは、現実には不可能と思われるのですが。

このような日常業務を踏まえ、この研究会の中で、情報の特性—情報は相対的概念である—というところに強く心をひかれました。送り手と受け手の存在は、普段意識していないけれど、問いに応え、情報を与える立場で送り手である私は、受け手の要求を把握出来ていたであろうか、相手の認知能力をきちんと認識出来ていたであろうか、深く考えさせ

られました。我校の場合は相手が高校生または教職員に限定され、発達段階に大きな格差はないとはいえ、相手を知る認知能力、相手に対する表現方法については、初心に戻って日常業務に当たらなければならないことを再認識させられました。と同時に情報社会であっても図書館にとって利用者と情報の橋渡しとなるものは人である事を確信しました。

## 肩肘張らずに情報管理－「情報管理概論」参加レポート

川北恵美子（京都大学大型計算機センター）

1. 明け方4時まで、図書館で借りた小説にのめり込んでしまったこと、  
 2. 柴田先生が、OHPを使用されるため室内を暗くして下さったこと、  
 3. 昼食にしては少し多めの量をお腹に詰め込んでしまったこと、  
 etc.により『情報管理概論』の講義は、結論の「情報の定義」の段階でもうすでに、私の頭上を行きつ戻りつ浮遊していた。

常々、情報過多の時代に生き、仕事から、情報の洪水の中で溺死しかけている姿を自認している身にとって、「情報の何たるかを明確に把握し、適切な取捨選択を行い、最も効果的に管理運用すること」は、公私ともに差し迫った課題である。それにもかかわらず、思わず船を漕いでしまうとは！

柴田先生の声が遠くなり近くなり、頭の中で<情報><時代背景><伝達><データ><ニューメディア>etc. の用語がバラバラに飛び交っているとき、「情報というものは、立場によってプラスに評価されたり、マイナスと考えられたりする・・・」という言葉が耳に飛び込んできた。少し考えればごくごく当たり前の、この「情報の特性」であるがこの特性をつい忘れてしまうがために陥る落とし穴がある。

コンピュータ関係の専門図書室で資料を収集・整理・提供する仕事に携わる日常で、いつも念頭に置きながら、しかし密かに危惧を抱いているのは「利用者のニーズに応えられているか？」ということである。

情報管理の原則を、柴田先生は「網羅性」「正確性」「迅速性」と挙げられていたが、その中でわが図書室にとって最重点課題の「迅速性」の追求にこだわるあまり、無意識に<役立つ情報><役立たない情報>に振り分けるという過ちを犯している自分に気付かされた。役立つ、役立たないを決めるのは、利用者なのである。

私達図書館員に求められるのは「利用者の情報要求の正確な把握」であり、そのために情報を求める利用者の認知能力を見極め、それに見合う情報を提示するのが任務である。

小規模の図書室で、情報管理の最初から最後まで関わるという利点は、裏返せば、限りある予算を最大限に有効に使う努力を怠れないということであり、私にとっての今後の課題も、20年余り日常業務に追われ、何時も自分に言い訳しつつ後回しにしてきた「主題知識の修得」に尽きるのである。

しかし、大上段に振りかぶってみても一朝一夕に身に付くものでもなく、ここはやはり肩肘張らずに、こつこつ利用者から学んで行くしかないのである。《情報》とは、時代によって変わり、分野・対象によって異なり、立場によって違うものなのだから。

## 大図研大学「情報管理論」を受講して

湖城 強 (大阪市立大学附属図書館)

大図研大学に参加しようと思ったのは、「情報管理論」という開講科目名に心が引かれたからです。仕事で端末やパソコンを触っていても、図書館での活動の中での意味が見えてきません。ここ数年、私の職場にもコンピュータやCD-ROMなどが導入されてきました。図書とカードと手作業のときと今とでは、何がどう変わったのか、道具は変わっても変わらない基本的なことがあるはずだと漠然と思っていました。「情報管理論」でそれを発見でき、日々の仕事の中で得た細々とした知識や思いを再整理・点検できると期待したからです。参加しての全体の感想は、一言でいえば、「日常業務」にすぐ役立つことでなくても、逆に役立たない基礎的な太い考え方を学ぶことはとても楽しいことです。また、学習する立場に立つことは利用者の立場に立つことですから。以下に第1回と第2回のそれぞれの感想を述べます。

### 【第1回の感想】

講義の中で特に心に残ったのは、①大学教育の目的再考(学部レベル)、②情報(提供)サービス、③マーケティングの3点です。大学教育の目的再考(学部レベル)では、情報リテラシー(情報処理能力)の涵養が大学教育の大きな目的であって、情報リテラシーを構成する6つの能力が解説されました。6つの能力のどの部分に図書館と図書館員がどう関わって行けばよいのか、考えさせられました。それは、大学での図書館活動の位置付けと役割を考える視点になると思います。できれば、研究者のレベルでの考え方も示していただいて、異なる点があるか否かを解説していただきたかったと思います。情報(提供)サービスの項では、利用者教育を通じて図書館がどこまでサービスできるか。教育(研究)との連携を強くすれば、新しいサービスを切り開いていけること、つまり、私が思っていたサービスからかけ離れていてまだまだだと感じました。マーケティングについては、対外的な問題たとえば予算獲得もありますが、長期的な問題を考えるときに、客観的な視点の提供とそれによる館内・学内の共通の認識によって、限られた資源(人、モノ、カネ)の最適な配分と意見をまとめる上で絶対に必要ではないかと思います。

### 【第2回の感想】

「情報」という言葉を普段なにげなく使ってましたが、情報についての意味やその特性についてさまざまな面から紹介されたので、今後の考えるヒントとしたいと思います。

情報に関わる人々のさまざまな立場によって、情報に対する感じ方、受け取り方が違うこと、情報と認知の問題、情報をめぐる人間的要素が重要な問題だと思いました。情報を仲介している大学図書館の職員である私自身は、いつの間にか「利用者」をある一定以上の認知能力がある、または、あるべきであると決めつけていたのではないかと大いに反省させられました。また、これは第1回の利用者サービスのなかの情報リテラシーや利用者教育とあわせて考えるとサービスの問題の重要な要素のように思われました。基礎の基礎を紹介していただいたわけですが、日々の仕事との関連でどのように考え方が生かされているのか今後の講義の中で見えてくると期待しています。

# 近畿五支部新春合同例会

日時 1994年2月5日(土) 15:00~17:00

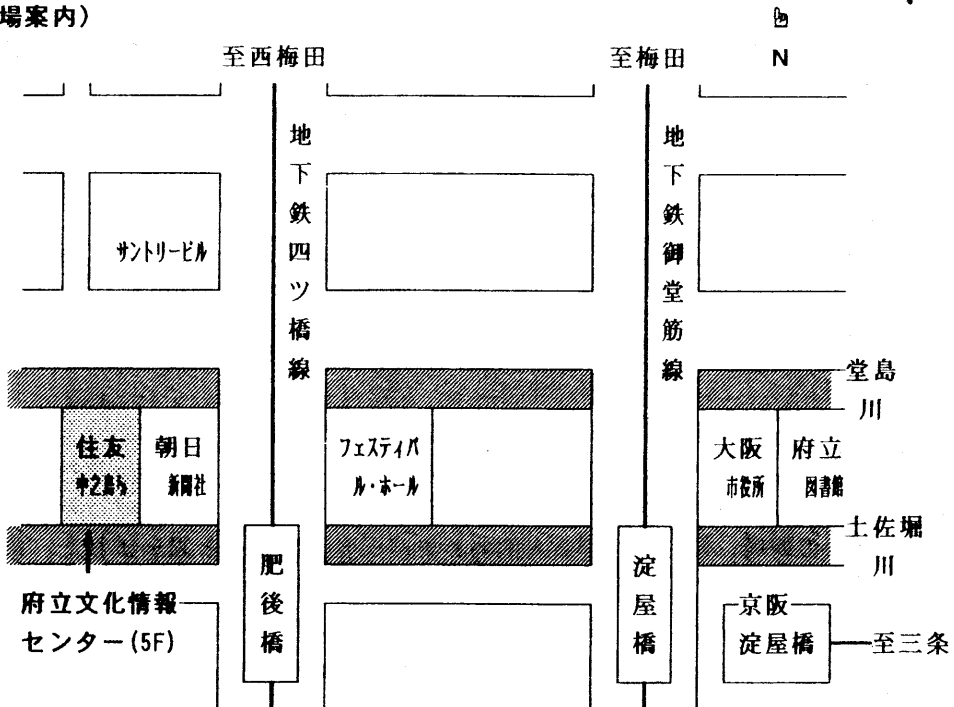
場所 府立文化情報センター  
(大阪市北区中之島3-2-18 住友中之島ビル5階 06-444-1011)

講師 石原武政氏 (大阪市立大学商学部教授) [演題未定]

懇親会 「志河」堂島店 17:00~19:00  
(相撲料理、会費5,000円程度)

参加申込は12月中  
村上健治(国立民族学博物館・06-876-2151 内2061)まで

(会場案内)



- 地下鉄四ツ橋線「肥後橋」下車 徒歩約5分
- 地下鉄御堂筋線「淀屋橋」下車 徒歩約10分
- 京阪電鉄「淀屋橋」下車 徒歩約10分